

田沢湖のクニマス(標本) 文化財保護法の規定による記念物文化財登録原簿登録

- ・名称及び員数 田沢湖のクニマス(標本)2体
- ・指定年月日 平成20年7月28日
- ・所 在 仙北市田沢湖郷土史料館

世界で唯一、田沢湖に生息していたサケ科魚類のクニマス(*Oncorhynchus nerka kawamurae*)は1940年代に絶滅した。現在のところ、確実にクニマスと確認できる標本は、世界中に17体ほどしか残されておらず、県内には5体のクニマスの標本が確認されている。仙北市田沢湖郷土史料館にはその内の貴重な2体の標本が展示されており、誰もがみることができるとあり、クニマスが辿った悲しい歴史と在りし日の姿を感じることができる標本である。

「クニマス及びクニマス標本の学問的意義」

杉山秀樹(日本魚類学会自然保護委員会委員、秋田県水産振興センター所長)

クニマスは、ジョルダン(D.S.Jordan)とマクレガー(E.A.McGregor)により、川村多実治教授から贈られた秋田県田沢湖で採捕された3個体の成熟した雄の標本に基づき、1925年にサケ目サケ科サケ属の田沢湖固有の新種として記載された。その際の標本は、模式標本1個体及び副模式標本2個体として、現在、アメリカの2機関で保存・管理されている(前者はシカゴ博物館、後者はスタンフォード大学から移管されカリフォルニア・アカデミー・オブ・サイエンスで保管されている)。

クニマスが生息していた田沢湖はほぼ円形のカルデラ湖で、周囲20km、最大水深425.5m、国内では最も深く、世界的にも17番目である。湖盆は岸からすぐに崖状に深くなるため、面積は25.7km²と狭く国内21番目であるが、水容積は国内4番目である。水深100m以下では水温4℃以下とほぼ一定で、透明度は33mときわめて高かった。湖には、周囲の小河川からの流入水があるだけで、流出水は雄物川水系に注いでいた。湖は中新成後期から鮮新成前期、700万年から200万年前の火山性陥没によって成立したと考えられている。クニマスはこのような特殊な環境で進化したものであり、逆に、クニマスの存在は田沢湖の特殊性を象徴するものでもある。

クニマスの生態もきわめて特異的で、その産卵盛期は1月下旬から3月上旬の厳冬期であった。すべてのサケ科魚類において、このような産卵生態を持つものは知られていない。

このようにクニマスの存在自体がきわめてユニークであり興味深いのが、1940年に田沢湖に酸性水を導水したため絶滅した。したがって、本種に関する形態的、分類的な研究はきわめて少ない。さらに、絶滅時期が戦争中であったこと、生息場所が田沢湖に限定されたこと、標本の学問的意義と重要性に関する理解が不足していたこと、標本を管理する機関が発達していなかったことなどの理由により、現存している本種の標本数は20個体以下でしかない。

クニマスの標本数は少ないが、現存するその標本そのものの貴重性を理解し、確実に管理・保存することの学問的意義はきわめて大きく、むしろ、責務として行うべきことと考える。特に、軟エックス線撮影による内部骨格系の観察やPCRによる塩基配列の把握、成分分析など、現在の科学技術のレベルでは十分に対応できないような分析内容についても、今後開発されるであろう新たな研究方法の導入や技術革新により、解析の可能性が出てくる。それは、当然のことながら標本が存在して初めて可能となるものである。何よりも、クニマスの存在そのものを後世に伝えるのは、クニマスの標本そのものであることは論を待たない。

(以上、原文まま)

田沢湖郷土史料館では今回の登録記念物の荣誉に恥じない充実した展示を行っていきます。また、過去の地震では数体の貴重な標本を失ったという反省を踏まえ耐震対策の充実にも努めます。

この貴重な標本を多くの市民に見ていただくと共に、時代の流れの中で絶滅していった田沢湖独自の生物がいたことや、かつて田沢湖で漁業が行われていたことや、たくさんの種類の魚がいたことなどを知ってもらいたい。そして、それらのことを市民みんなで語り継いでいけたらと思う。年内は11月10日までの開館です。是非一度足をお運びください。



オス、全長268mm、
昭和5年9月12日採取、
特徴:尾鰭の湾入は浅く、
胸鰭が相対的に長いとい
った特徴が見られる。



オス、全長253mm、
大正14年4月1日採取、
特徴:尾鰭の湾入はほとん
ど見られない。